

大島正先生を憶う

木 原 太 源

(大学文学部助教授)

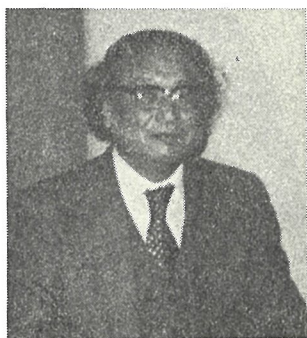
大島先生と初めて出会ったのは今からおおよそ四半世紀も前になる。当時私はスペイン語を学ぶ学生であった。週に一度非常勤講師として私達の大学へ出講されていた大島先生は、二・三年次の講読を担当しておられた。初めて先生の授業を受けた時のことである。

読解を命じた学生達がギクシャクした解釈しかできないのが気に入らなかったのか、突然語気鋭く私達をなじられた。痛罵を浴びた私達は口惜しくならず、殊に最後の言葉は痛く私達のプライドを傷つけた。できなかったらばろくそにけなされるぞ。先輩達から耳にしていた言葉通りであった。最初の授業だからそこそこの予習をやっておけばなんとかなるだろうという私達の甘い考えは吹き飛んだ。翌週読解を命ぜられた私は意気込んで訳をし終えると、どうだとはかりに先生の顔を見詰めた。すると「続けてやれ」と言っただけで、やりとされた。そこで私は訳をさらに進めて行った。ところが解せぬところがありその旨を告げると、すぐさま返ってきたのは叱声ではなく助言であった。いささか面喰って先生の顔を見ると、再びニヤリとされた。わしはいい加減なことは許さないぞ。逃げずにぶつ

かってくればいくらでも応じてやる。ニヤツとした目がこのように語りかけていた。

大島先生と親しく言葉を交せるようになったのは卒業後研究室に残ってからである。先生が日本比較文学会の役員として活躍しておられることを知ったのもこの頃である。「君、比較文学会に入りたまえ。スペイン語だけの視野に閉じこもってはだめだ。複眼的な視野から研究できる方法を身につけなさい。そのためには比較文学会是最適だよ。スペイン語学会の連中は視野が狭くてどうにもならん」相変わらずの毒舌ではあったが親切でありがたい助言であった。

大島先生は、自分がよいとおもったことは他人にも当然よいことだという考えの強い人であったから、他人を強引に自分の考えに同調させようとする傾向が顕著であった。親切心の発露からであることはよく理解できたが、辟易して敬遠する人も少なくなかった。だから大島先生には応否をはっきり告げることが肝要であった。すると「頭の悪い奴だ」と言いつつ引き下られた。自身がそうであるように、挑んでくる者には好感を持ち、すぐさま後ろを見せる者を毛嫌いした。しかし誰



れとも気さくに言葉を交し、人を選ぶということとはなかった。勿論齒に衣着せぬ人であったから敵も多かったが、味方にすればこれほど心強い人はいなかった。また腹中の考えが容易に推し測れる人なのでコツが分ると交際（まじりあ）は楽であった。しかしあの強烈な個性に呑みこまれぬよう常に気をつけておかねばならなかった。

多忙な先生であったが、合間をぬっては何人教師や私達を呼び寄せて輪談会を開かれた。ところが輪談会はいつの間にか長広舌をふるう大島先生の独演会と化すことがしばしばであった。そして最後に「腹が減った。君らもそうだろう。何か食ってから帰ろう」としめくくった。食事の量は人の倍、酒量もかなりのものであったが深酒することはなく、酔どれた姿を目にしたことはなかった。飲みながら喋り、喋りながら食し、片時も口を休めることはなかった。何んでもおいしそうに食べる人であった。

全方位の電波をキャッチする高感度のアンテナのように、胡散臭いものを鋭く臭ぎ分け、嗅覚の持ち主であった先生は、合点のゆかぬことには敏感に反応し追求の手を緩めるこ

とはなかった。税金訴訟の件はまさにその精神の発露であった。「国家財源の根本を問う裁判となるから勝訴することはない。とにかくサラリーマンだけに必要経費を認めていない税制が腹に据えかねるので、風車に立ち向うドン・キホーテになったんだ」

このドン・キホーテを産んだスペイン文学への関心は広範にわたり、スペインの近・現代詩を初め古典の研究や翻訳に精力的に取り組まれ、その成果を活字にして盛んに世に問われた。主人公の名を世界共通の普通名詞にしたスペイン古典文学を代表する三つの作品中、ドン・ファンとセレスティーナは昭和四十一年と四十九年に翻訳出版された。本邦初訳であった後者の訳書は翌五十年度の日本翻訳文化賞を授賞した。停年退職が間近に迫った昭和五十六年、初めてスペインの土を踏まれた先生は、ドン・キホーテの作者セルバンテスの研究を退職後のライフ・ワークにせんものとの多数の資料を土産に翌年帰国された。ところが残念なことにはこれらの資料を前に人一倍林しがり屋でひとなつこいやんちゃ坊主そのものであったわが師大島先生は、三月三日六十五歳で鬼籍に入られたのである。

重久篤太郎先生のことども

北 垣 宗 治

(大学文学部教授)

同志社大学の英文学科は英学史の分野で三人の誇るべき先達、大家を生み出してきた。卒業年順に言えば一九二一年卒の手塚竜麿、一九二三年卒の絹笠梅治郎（一八九九—一九八二）、そして一九二九年卒の重久篤太郎（一九〇三—八四）の三先生である。手塚先生はなおご健在である。まだお元気そうに見えた重久先生を本年一月十二日に失ったことは残念でならない。ご生前に重久先生から親しくして頂いた一後輩として、先生を偲びつつこの一文を書かせて頂きたいと思う。

先生は上野直蔵総長と同期生だった。若い頃から歴史的な探求心が旺盛で、英学の歴史に興味を持たれた。同志社高等商業学校教授となられたのち仙台に移り、東北帝国大学の司書官として活躍されたが、空襲で蔵書の全部を焼かれるという苦難にも会われた。戦後は京都に戻り、京都市立美術大学教授として英語を担当なさるかたわら、同志社大学にも出講し、図書館学関係の科目を長らく担当された。美術大学を退職して名誉教授になられたからは、金蘭女子短期大学教授として授業を続けておられた。

重久先生と私の接触が始まったのは、いう

なれば上野先生の「ご命令」によるものだった。一九六四年に日本英学史研究会という小型の学会が組織され、重久先生はその創立発起人の一人であったが、その学会の関西支部会を作ろうということになり、当時同志社大学長だった上野先生に相談をもちかけられた。上野学長は、一八七五年に出版した同志社英学校は、いわば関西における本格的な英学の濫觴だったのだから、同志社でも英学史の研究をすべきであるとの考えから、私に白羽の矢をお立てになり、重久先生に協力して、日本英学史研究会の関西支部は尋真館四階の私の研究室に置くことになった。そういうわけで一九六四年から毎年十二月に尋真館会議室で関西支部大会を開いたし、例会も時々開いた。その委員会の中心が重久先生であり、委員には京大の渡辺実先生や産大の宮西光雄先生がおられ、私は世話係をつとめた。私が委員であったのは最初の四年間で、一九六八年の末に私は在外研究に出掛けた。

重久先生は資料探索のためにはどこまでもこまめに足を運ばれた。常に柔和で怒った顔を見せられたことがない。英学史の研究には一種の探險家的な楽しめと探險家的な苦勞が



伴うものだが、先生はその苦勞をものともしないで、その楽しみをずっと追求し続けられた。たとえば熊本バンドの育ての親はL・L・ジェインズであるが、このイニシャルのL・L・は何か？ これは重久先生が第三高等学校関係の古文書を調べて、(レロイ) Leroy Lansing であることをはじめて確認されたのであって、それまで誰もL・L・が何をあらわすかを正確には知らなかったのである。

フェノロサの墓が天津の三井寺にあることは知られているが、彼の遺灰がどのようにしてロンドンから日本までもたらされたのだったか？ 日本美術のすばらしさを海外に紹介した大恩人フェノロサの遺灰を運んだのは日本政府が派遣した軍艦だったと従来伝えられてきた。しかし重久先生はそれに疑問を抱き、真相の究明に乗り出され、山中商会関係の人々の間をさぐり、ついに軍艦説はあやまりで、山中商会の加藤八十太郎氏がシベリア経由で運んだのであったことを立証された。

新島襄が一八七二年に田中不二麿文部理事官を案内して英国を訪れたさいに、当時英国文部省の視学官であったマシュー・アーノルドに会っている、ということをいち早く唱え

られたのも重久先生だった。現在新島の英文日記はオーテス・ケリー教授の手で編纂が進んでおり、全集の第七巻に入ることになるが、先生はあの読みにくい新島の英文日記に目を通した上で、先生独得のカンでアーノルドの名前をそこに発見された。それまで同志社の誰一人として新島がアーノルドに会ったという事実を知らなかったのである。日本の英文学者にとって、これは耳をそばだたせるほどのニュースである。恐らく新島はアーノルドが会った最初の日本人だったと言えるだろう。ヘルマン・ヘッセにとって新島がまさしく最初に会った日本人であったように。

日本における英学史家としての先生のご業績は『日本近世英学史』(一九四二)、『お雇い外国人―教育宗教』(一九六八)、『お雇い外国人―地方文化』(一九七六)の三冊に結晶している。ことに『日本近世英学史』は一九八二年に名著普及会が増補再版を出したのであり、まさしく名著として、先生の輝かしい学殖を永久に伝えるであろう。